巻頭言

コンペイトウ大学に思う

企画調整部長
谷口　稔明
TANIGUCHI, Toshiaki

2004年11月20日の朝日新聞夕刊の窓というコラムに「コンペイトウ大学」が紹介されていた。大学は突起一つひとつに特徴があるコンペイトウでなくてはならないをモットーにして、ある地方都市の工学系の私立大学での個性的な教育を紹介したものである。入試の偏差値は必ずしも高くはないが、受験生は年を追って増え、大企業に続々と就職しているという。この背景には大学における学生主役の教育に重点を置いた取り組みが功を奏し、入学時の能力をどれだけ向上させるかを目標にしているという。そのために、学生がいつでも質問できる体制作りなどが徹底されているとのことである。このような教育の重要性は誰しも考えていたこととは思うが、それを実践し、成功させていることは大変すばらしいことである。

翻って、私たちの研究所には毎年、何名か研究者を志して入ってくる。いずれも難しい試験に合格した優秀な人たちである。しかし、これまでを振り返ると、試験採用者のすべてが、研究者として大成しているとは言い難い状況である。しかし、コンペイトウ大学の記事を見て感じるのは、入ってきた若者を若者主役で、研究者として十分教育し、鍛えてきたかということを考え直す必要があるように思える。研究所として、入ってくる若者の能力をどれだけ向上させたか、付加価値をどれくらいあげているか、見直す必要がありそうである。

私のような古い世代では、教えられることを待たずに、自分で積極的に技を盗めといわれて育ってきた。昔の古い徒弟制度を思い出させるような状況であるが、面倒見の良い上司や同僚に囲まれた場合には、多くのことを学ぶことができ、しかも生涯にわたって同じ釜の飯を食べた仲間意識のようなものが生まれてくるメリットがある。しかし、反面、面倒見の悪いところでは、研究者として伸び悩む場面に陥りやすい。研究者の育成は大変難しく、これが正解という明確なものをなかなか導き出せないものであるが、面倒見を良くすること、わからないときはいつでも応えられる環境を作ることは少なくとも研究者として育成するに必要な条件として当てはまることであろう。今、研究所に入ってくる若い人たちは自分たちの世代と比べてはるかに優秀な人たちである。少なくとも入って来たときは優秀でも、入ってからはふつうの人以下にしてしまったという愚かなことは避けたいものである。

現在の国の財政事情が厳しい中では、研究所の研究者の数が増えることは、あまり望めない。そのような状況では、現有の一人一人の存在価値が高くならざるを得ない。一人一人の個性や能力に見合った教育をして、研究者として大成させることができる環境作りがますます大切になるものと思われた。その中で与えられた使命と役割を自覚し、人間としても磨きあげられた研究者が育つようにして行きたいものである。と同時に、研究所としてもコンペイトウの突起のような特徴のある研究所となることも大切と思われた。